様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０１２６

研究課題名（和文）２０世紀後期の環太平洋とアメリカ文学・映像文化：記憶と主体の生成変化

研究課題名（英文）American Literature and Cinema in the Late Twentieth-Century Transpacific: Images and Bodies in Becomings

研究代表者
井上　間従文（Inoue, Mayumo）

一橋大学・言語社会研究科・准教授

研究者番号：５０５１１６３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は１９４５年以降トランスナショナルな統治形態として展開する米国を中心とする軍事と資本の循環の中断点としての詩的イメージやフィギュールを戦後アメリカ詩と映像、および一部の日本語における詩的表現に見出したことにある。これら論点は二つの英語論文でのテレサ・ハッキョン・チャ、チャールズ・オルソン、清田政信などにおける詩的・映像的イメージ論において顕著である。特異的で代替不可能でありどこか奇妙なイメージが過去の惨事を繰り返すことを禁ずると同時に、そうした惨事を繰り返さない共生のビジョンを既存のアイデンティティ図式への抵抗として拡散していることをアメリカ文学・映像の分析を通して明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study elucidated the ways in which poetic articulations of images and figures might constitute the interruptive caesuras of the trans-national mode of governmentality that has been instituted by the U.S. and other states across the Pacific since 1945. Such an argument that situates the critical import of poetic figures and cinematic images in particular in the transpacific politics since 1945 has been evident in the two papers that I published in the American scholarly journals Criticism and Discourse. In these papers among others, I have elucidated the ways in which poetic inscriptions of singularity as that which is irreplaceable and somehow uncanny prohibits us to repeat political catastrophes and to proliferate the vision of an alternative community through and as a resistance to the current schema of nation-states in the transpacific US and East Asia.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：トランスパシフィック　美学論・感性論　ポストコロニアル研究

１．研究開始当初の背景

トランスパシフィック（環太平洋）を横断するアメリカ帝国の進展と文化・言説編成を批判的に研究する動きは１９９０年代以降アメリカにおいては顕著であったが、その際に文学作品や映画・映像作品の美的・形式的特徴に注視した研究は稀であった。「ニューアメリカニスト」または「ポストナショナル・アメリカンスタディーズ」といった研究の潮流がアメリカを帝国的編成の一部として研究の遡上にあげたことは 1990 年代以降のいわゆる「アメリカン・スタディーズ」のなした大きな貢献であった。しかし、こうした学問の傾向が文学や映像といった芸術表現を社会学的あるいは文化研究的な議論のための証拠の一部へと縮減してしまうことで、その表現の形式、レトリック、媒体性そのものが内包する政治的・倫理的意義が看過されてしまう問題点の再検討が求められてきた。つまり文学作品や映像作品を言説分析の資料として解読する手法が安易に公式化されることによって、これら作品の美的フォームやそのフォームからの逸脱といった諸特徴そのものが暗示する政治・倫理的な展望や、来るべき共同性への示唆が削がれてしまっていたと言える。

もちろん幾重にも規定された社会・政治的文脈において、感性論・美学と日本語で訳されることの多いエステティクスが内包する政治・倫理的問いかけへの関心は文学、映画研究においてすでに高まりを見せている。レオ・ベルサーニのフォーム論、ジル・ドゥルーズの時間イメージ論、ジャン＝リュック・ナンシーの崇高論などがその顕著な例と言えよう。だが Fred Moten や Lauren Berlant など理論的水準の高い研究で知られる学者らによる一部の書物をのぞいては、トランスナショナルなアメリカ研究においてカント以降の美と崇高、さらには構想力・想像力と知性・悟性をめぐる議論が研究の対象や手法に影響を及ぼすことは未だに稀である。

本研究では、こうした一連の理論的書物の到達点を、これまで実証的文学史や言説分析的な読解が中心であった環太平洋アメリカ文学・映画研究に導入することで、本研究は既存のナショナリティの図式を維持した上での連帯や共生ではなく、それらの図式の中断として生起する出来事としての新たな共同性を描くことを目指した。

２．研究の目的

本研究では酒井直樹が「対形象の図式」と呼んだ構想力のあり方が諸ナショナリティ（民族、国民）を相互参照的に「想像の共同体」として自明なものとし、さらにこれら諸ネーションがネットワークを形成することで軍事覇権や資本循環を可能にするシステムとして１９４５年以降米国の覇権下にて制度化されて来たことをまずは重視している。またさらに、そうしたシステムの中断点としての特異な身体と特異な記憶のイメージの連なりをカント以降の批判的な美学理論の論者（ナンシー、アドルノ、ドゥルーズ）などに依拠することで描くことを目的とした。

また主に詩を中心とする文学作品と映像・映画作品の双方において、諸ナショナリティの図式から逸脱する諸フォームのあり方に注目することで、詩的（ポエティック）なものとしての特異性がしかし単独なままではありえずに、複数のアート、複数の読者と観者、複数の能力（感性、構想力、知性、理性）によって分かち持たれていることに光を当てようとした。

従って本研究は一方では、１９４５年以降アメリカが帝国日本に代わって東アジアにおいて展開することとなった、単なる帝国主義には縮減不可能な「帝国的編成」とも呼べるようなトランスナショナルな統治形態の位相の中に同時代のアメリカ文学と映像作品を位置づけることを目的としている。また他方では、アジア系を含むアメリカ文学や映像作品が、こうした実証的歴史状況の中にありながらも、その状況が想像することを困難にしている新しい記憶の想起の仕方と、それらを想起する主体の生成の過程を、いかにしてイメージ、レトリック、作品の形式、色や音などの感性的諸特徴として提示しているかを明らかにすることに焦点をおいた。

３．研究の方法

研究代表者は前回の科研費課題「環太平洋アメリカ文学：記憶のエステテイーク」（平成２１年度・若手 B）では、歴史的記憶が人間の構想力（想像力）の枠を震わせながら、既存のアイデンティティ図式を問いに付しながら幅広い人々に分有されていく過程を見て取った。

今回の研究課題はこの問題意識をさらに進め、こうした歴史的記憶そのものが過去に潜む潜勢力でありながら同時に現在における「問い」として到来することで、現在の人々を生成途上の存在として変容させうることを見て取った。前回の研究課題が２０世紀環太平洋地域におけるアメリカや日本による戦争の記憶の分有の可能性を、１９４５年後以降のナショナリティの図式に抗するかたちで押し広げるものであったとするならば、今回の課題では、こうした抵抗が同時に新たな民衆や主体の生成でもあることを、主にドゥルーズ、アドルノ、ナンシーにおけるカント美学の批判的再展開などにも依拠しながら描写することに務めた。

また文学と映像を架橋するかたちで、上記のようなナショナリティの図式に形をあたえてしまうイメージには縮減不可能な特異なイメージの表出の場として、特定の文学作品や映像・映画作品を読み取ることに務めた。主にリオタールなどが提示したフィギュラティブなもの（言説の形象であるもの）とフィギュラルなもの（自らの特異性のイメージ

であるもの）との差異などにも基づき、植民地化された地域や軍事占領された場所における抵抗のナショナリズムがネーション形態を反復してしまう隘路からの逸脱を模索する身体像や共同性のビジョンを、こうした文学イメージや映像イメージに見て取ることが出来た。

４．研究成果

この研究の成果としては、まずは米国の文学研究誌 *Criticism* に掲載された論文"Theresa Hak Kyung Cha's 'Phantomnation': Cinematic Specters and Spectral Collectivity in *Dictée* and *Apparatus*"が挙げられる。

同論文ではテレサ・ハッキョン・チャの映画、映画理論、そして文学作品『ディクテ』を通底する形で反復・変奏される特異性としての「フィギュール」への関心が顕著であることを明らかにした。そしてこの「フィギュール」が帝国日本植民地期及び米国の覇権下にある韓国・朝鮮における「女性」の「ネーション」への希求には収斂することの決してない共同性への欲求へとも繋がっていたことに光を当てた。より具体的にはチャが編集した映画理論集 *Apparatus* に収録された当時最先端とされたフランスの映画理論家（バルト、メッツ、ボードリーなど）たちの論考における「フィギュ―ル」理解を再読することで、チャ自身がこれら理論家たちにおいても十分に深化されることがなかった「フィギュ―ル」概念を独自なかたちで再解釈および発展させていたことを読み取った。

チャにおける文学と映画（理論）との連続性を、チャのポストコロニアルなポリティクスに結びつけた本論文への評価は高く、米国学会誌での査読委員任命、書評執筆、台湾等からの国際学会への招へいなどにもつながることとなった。

また論文“The Objects across the Pacific: Poetic Interruptions of Global Sovereignty in Charles Olson and Kiyota Masanobu.”も同じくアメリカの学会誌 *Discourse* に既に掲載が決定している。本論文では、戦後アメリカ実験詩の中心人物であるチャールズ・オルソンの戦後太平洋に関する思想と詩作における「オブジェクト」議論を、おなじく戦後米軍統治下沖縄を代表する詩人清田政信の「オブジェ」論へと接続することで、両者が図らずして、太平洋を隔てたトランスナショナルな統治体制としての米国や、米軍によって生産されながらそこから逸脱していく存在としての廃棄物および廃棄可能な労働力への関心を詩的イメージの源泉としていたことを明らかにした。オルソンの詩と詩論におけるアジア太平洋への関心は、Michael Davidson などによって研究の対象とされて来たが、本論文ではオルソンがメルヴィルの緻密な読解を通じて描き出した主体性の廃墟としての「太平洋」が新たな共同性の揺りかごのようにイメージ化されていることを明らかにし、そしてこうした太平洋像と彼の主要詩論“Projective Verse”における「フィールド」概念との密接な接点を明らかにした。さらにはオルソンと清田それぞれの「オブジェクト」および「オブジェ」概念を米国および米軍が制度化する統治性の下での同時代性において考察することで、通俗的な「比較文学」の枠そのものを問いに付すかたちでの複数作家・詩人研究の手法を探求した。

これら二つの英語論文へとつながった他の論考としては、F.O.マシーセンにおける身体と情動をめぐる思考をアメリカ・ナショナリズムからの離脱の可能性として読解する「帝国の「ほつれた縁」、または、生政治の「孤島」たち―マシーセンとオルソンの『白鯨』論」、さらには日本語での清田政信論「石たちの「共感域」―1960 年代の清田政信における「オブジェ」たちの共同性」がある。

そして、１９４５年以降のトランスナショナルな統治形態において想像の共同体として措定される「沖縄」なる場所について、こうした想像の共同体における（としての）主体化＝従属化のグリッドからの批判的離脱を試みる現代芸術家・写真家論として「時間の押し花を拡散させること－仲宗根香織の写真における「過去／未来」のイメージ－イメージ論に向けて（1）」と「根間智子、暗い部屋からつながる特異なかたち－イメージ論に向けて（2）」を発表した。また、この二つの論考に、帝国的権力編成とその構成要素としての「ネーション形態」についての理論的思考を加えた論考として、「承認の外へ―根間智子と仲宗根香織の写真における「問い」としての沖縄」を執筆した。

また複数の国際学会においては上記の作家に加えて、金時鐘、Myung-mi Kim などの詩人に関する発表を行った。また諏訪敦彦、イ・チャンドンといった東アジアの映画作家の作品における「国際関係」からの離脱の可能性と、その可能性を担保しうる記憶想起のあり方についての口頭発表を行った。

さらには、戦後日本・米国・沖縄間の外交関係において維持されてきた多国家的軍事体制を、これら国民主義的共同体の（男性化された）エリート知識人や外交官同士の「友好」関係として縮減すると同時に隠蔽する知と感情のあり方を批判しうる文学と批評のあり方をめぐる口頭発表を行った。

トランスパシフィックなアメリカ文学研究を美学・感性学の政治性という視点から探求する本研究の成果を二つのアメリカ学会誌に論文として掲載できたことの意義は大きい。今後、アメリカン・スタディーズ、アジア系アメリカ研究、および批判的東アジア研究を横断的に架橋する研究者たちとの協働作業を模索する際に、この２論文が大きな助けになることが期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　8 件）
①Mayumo Inoue. “The Objects across the Pacific: Poetic Interruptions of Global Sovereignty in Charles Olson and Kiyota Masanobu.” Discourse: Journal for Theoretical Studies in Media and Culture, Vol. 37, no. 3 (Forthcoming), (2016).（査読有）

②井上間従文「時間の押し花を拡散させること―仲宗根香織の写真における「過去／未来」のイメージ―イメージ論に向けて（1）」、『las barcas』別冊、32-41 頁、2014 年　（査読無）

③井上間従文「根間智子、暗い部屋からつながる特異なかたち―イメージ論に向けて（2）」、『las barcas』別冊、83-91 頁、2014 年　（査読無）

④Mayumo Inoue. “Theresa Hak Kyung Cha's 'Phantomnation': Cinematic Specters and Spectral Collectivity in Dictée and Apparatus” Criticism: A Quarterly for Literature and Arts. Vol. 56, no. 1: 63-87 (2014).（査読有）

⑤井上間従文「帝国の「ほつれた縁」、または、生政治の「孤島」たち―マシーセンとオルソンの『白鯨』論」、竹内勝徳、高橋勤編『環大西洋の想像力―越境するアメリカン・ルネサンス文学』、図書所収論文、彩流社、321-345 頁 2013 年　（査読無）

⑥井上間従文「石たちの「共感域」―1960 年代の清田政信における「オブジェ」たちの共同性」、『Las Barcas』 2 巻、39-51 頁 2012 年　（査読無）

〔学会発表〕（計　8　件）
①Mayumo Inoue. “On Bright Humor: Cinematic Sensoriums of History in Recent East Asian Films”(Association for Asian Studies Annual Conference), 2015 年 03 月 27 日, Chicago (the U.S.)

②Mayumo Inoue. “Critique of Friendship: On Global Sovereginty, its Nation-Forms, and People without a Country” (The Japanese Association for American Studies, the 48th Annual Meeting), 2014 年 06 月 8 日, 沖縄コンベンションセンター（沖縄県宜野湾市）

③Mayumo Inoue. “Afterlives of the Uprising in the Global State: Myung Mi Kim’s Commons and Kim Shijong’s Kwangju Fragments”(American Comparative Association Annual Meeting), 2014 年 03 月 21 日, New York (the U.S.)

④Mayumo Inoue. “Interrupting the Postcolonial/Neoliberal Governmentality: the Events of Light in Secret Sunshine”(Inter-Asia Cultural Studies 2013), 2013 年 07 月 3 日, Singapore

⑤ Mayumo Inoue. “On Bare 'Objects': Kiyota Masanosbu’s Poetics of ‘Stones’ in the US-Occupied Okinawa” (Except Asia: Agamben's Work in Transcultural Perspective)、2013 年 06 月 25 日、Taipei (Taiwan)

⑥ Mayumo Inoue. “Theresa Hak Kyung Cha's Hauntology” (“Supernatural Asia-Exploring the Natural and Supernatural in Asian Cinema”)、2013 年 04 月 27 日、城西国際大学東京紀尾井町キャンパス（東京都千代田区）

６．研究組織
(1)研究代表者
井上　間従文（Inoue, Mayumo）
一橋大学・言語社会研究科・准教授
研究者番号：50511630